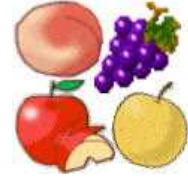




平成29年度 果樹情報 第9号

(平成29年7月20日)

福島県農林水産部農業振興課



1 気象概況（7月前半：果樹研究所）

平均気温は、1半旬が24.0℃で平年より2.2℃高く、2半旬が26.6℃で平年より4.2℃高く、3半旬が27.8℃で平年より4.7℃高く経過しました。

1半旬から3半旬の降水量は34.0mmで平年の35%でした。

2 生育状況（7月15日時点：果樹研究所）

(1) もも

ア 果実肥大

暦日比較では、「あかつき」は縦径が55.4mmで平年比101%、側径が58.0mmで平年比102%と平年並であり、「ゆうぞら」は縦径が52.5mmで平年比107%、側径が50.5mmで平年比112%と平年より大きい状況です。また、満開後日数による比較でも、「あかつき」はほぼ平年並、「ゆうぞら」は平年より大きい状況です。

イ 新梢生長

満開後90日における「あかつき」の新梢長は平年比195%と長く、展葉数は平年比115%と多くなっています。葉色（SPAD値）は平年比99%と平年並で、新梢停止は平年に比べやや遅れています。「ゆうぞら」は、新梢長が平年比216%と長く、展葉数は平年比136%と多くなっています。葉色（SPAD値）は平年比95%とやや淡く、新梢停止は平年に比べ遅れています。

ウ 核障害の発生

「あかつき」の満開後85日における核障害の発生は、核頂部の亀裂が40%と平年並であり、縫合面の割裂が10%と平年よりも少ない状況です。

エ 収穫期予測

DVRモデルによる「あかつき」の収穫期予測（7月18日現在）では、本年の収穫始は7月30日頃、収穫盛は8月2日頃で、平年より3日早い見込みです。

オ 早生品種の収穫期と果実品質

「はつひめ」の収穫始期は7月7日と平年よりも1日早く、収穫盛期は7月11日で平年並でした。果実の大きさは273gと平年よりやや大きく、RM示度は13.1と平年よりも高めでした。

「日川白鳳」の収穫始期は7月10日と平年よりも6日早く、収穫盛期は7月11日で平年よりも8日早まりました。果実の大きさは249gと平年よりやや大きく、RM示度は12.6と平年よりも高めでした。

表1 もも早生品種の収穫状況

	収穫始			収穫盛			収穫終			果実重			RM示度		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
はつひめ	7/7	7/8	6/30	7/11	7/11	7/4	7/13	7/15	7/7	273	261	263	13.1	11.3	10.0
日川白鳳	7/10	7/16	7/7	7/11	7/19	7/11	7/13	7/22	7/15	249	230	248	12.6	10.7	10.6
暁星	未	7/23	7/15	未	7/27	7/18	未	7/31	7/22	未	215	214	未	12.7	12.6

(2) なし

ア 果実肥大

暦日比較では、「幸水」は縦径が42.2mmで平年比108%、横径が51.3mmで平年比109%、「豊水」は縦径が42.1mmで平年比105%、横径が46.8mmで平年比108%と両品種ともに平年

より大きい状況です。また、満開後日数による比較でも、「幸水」、「豊水」ともに平年より大きい状況です。

イ 新梢生長

満開後80日（7月14日）における「幸水」の予備枝新梢長は111.4cm（平年比98%）で平年並、不定芽新梢長は98.7cm（平年比101%）で平年並、予備枝新梢の葉数は28.6枚（平年比93%）で平年より少ない状況です。予備枝新梢伸長停止率は100%（平年比111%）で平年より高く、不定芽新梢伸長停止率は100%（平年比113%）で平年より高くなっています。

同様に「豊水」の予備枝新梢長は109.0cm（平年比102%）、不定芽新梢長は89.6cm（平年比99%）で平年並、予備枝新梢の葉数は28.1枚（平年比97%）で平年並の状況です。予備枝新梢伸長停止率は100%（平年比115%）、不定芽新梢伸長停止率は100%（平年比115%）でともに平年より高くなっています。

ウ 裂果発生

「幸水」の裂果初発日は、平年で7月14日（平年は1990～2016年）ですが、7月18日（満開後83日）現在、まだ裂果の発生は見られていません。

エ 「幸水」の収穫期予測

7月17日現在、DVRモデルによる「幸水」の収穫予測では、収穫盛期は8月29日頃（満開後125日）で平年より2日早い見込みです。

表2 「幸水」の収穫盛期予測

本年	平年	昨年
8月29日	8月31日	8月22日

(3) りんご

ア 果実肥大

暦日比較では、「つがる」は縦径が60.8mmで平年比106%、横径が70.9mmで平年比109%と平年より大きく、「ふじ」は縦径が49.5mmで平年比96%、横径が55.8mmで平年比101%と平年並の状況です。また、満開後日数による比較では、「つがる」は平年より大きく、「ふじ」は平年並の状況です。

イ 新梢生長

満開後70日（7月9日）の調査で「ふじ」の一部に二次伸長が認められています。

(4) ぶどう

着色開始は「巨峰」の有核栽培、無核栽培ともに7月17日で、いずれも平年より5日早まりました。「あづましずく」は、長梢栽培が7月14日で平年より1日早く、短梢栽培が7月16日で平年より2日早まっています。

表3 ぶどうの着色開始状況

品種	栽培法	着色開始期					
		H29	H28	H27	H26	H25	平年
巨峰	有核	7/17	7/19	7/14	7/21	7/28	7/22
	無核	7/17	7/18	7/12	7/19	7/22	7/22
あづましずく	長梢	7/14	7/11	7/6	7/15	7/11	7/15
	短梢	7/16	7/15	7/9	7/16	7/17	7/18

注) 平年値はH20～H28年の平均。

3 栽培上の留意点

(1) 土壌の水管理

梅雨期は降水量が多く、湿害の危険性が高まります。土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉、根の障害を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。

一方、本年は6月の降水量が51.0mm（平年比42%）と少なく、7月の降水量も34.0mm（平年比35%）と少ない傾向にあり、今後、晴天日が続くようであれば、かん水を実施しましょう。

盛夏期における果樹園からの1日当たりの蒸発散量は、晴天日で6～7mm、曇天日で2～3mm、平均で4mm程度ですので、1回のかん水は25～30mm程度（10a当たり25～30t）を目安とし、5～7日間隔で実施しましょう。保水性が劣る砂質土壌などでは、1回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くします。

ただし、ももでは収穫5～7日前以降のかん水は糖度など品質の低下につながりやすいので、かん水が必要な場合は早めに実施しましょう。

(2) もも

ア 早生品種の収穫

現在、早生品種の収穫が行われていますが、核や胚に障害を持つ果実は成熟が早まりやすいので、果肉の軟化に注意し収穫が遅れないように留意しましょう。

イ 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが徐々に目立ってきています。このため、収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施するとともに、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測は、平年より3日早い見込みです。研究所内の「あかつき」はすでに着色期に入っていますが、これ以降の中生種においても、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。

(3) なし

ア 新梢誘引

不定芽新梢を含めた新梢誘引は、受光条件の改善や防除効果の向上、冬季せん定後の棚付けの省力化が図られることから、必ず実施しましょう。特に「豊水」の新梢は、湾曲したり下垂しやすいことから、新梢誘引により枝の方向を整えましょう。

イ 修正摘果

「幸水」は裂果発生時期となるため摘果を控えます。裂果が終息（満開後90日頃）したら修正摘果を実施しましょう。修正摘果は、肥大不良果、果形不良果、障害果等を丁寧に摘果します。

(4) りんご

ア 修正摘果

現在、果実肥大や果形、傷害の有無等の区別が付きやすい時期なので、小玉果、変形果、病虫害被害果、サビ果を中心に修正摘果を実施しましょう。特に結実数の多かった園地では、着果過多になりやすいので、早めに修正摘果を実施し適正着果に努めましょう。

イ 枝吊り・支柱立て

果実の肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の受光条件の改善、枝折れ防止及び防除効果の向上のため支柱立て及び枝吊りを実施しましょう。冬季せん定時に想定した高さまで枝を持ち上げ、養分が枝先まで達するようバランスを考えて実施しましょう。

(5) ぶどう

ア 着果管理

ぶどうの着色始めは、果房中のいくつかの果粒が飛び玉状に濃く着色するのが望ましく、全体的にぼんやりと色がまわってくるような場合は、着果過多によるものと考えられるので、早急に着房数の見直しを行いましょう。

イ 新梢管理

新梢が遅伸びすると、光合成により生産された養分は新梢の伸長に消費されてしまい、果実への転流が少なくなります。果実品質の低下や新梢の登熟不良を防ぐために、遅伸びしている新梢の摘心や余分な新梢の整理と誘引の見直し、副梢の整理と摘心等を実施し、棚面の明るさを確保しましょう。

具体的には、7月下旬～8月上旬頃に、伸長が停止していない新梢を摘心しましょう。摘心は先端の生長点を軽く摘む程度に行った方が副梢の発生が少なくなります。伸長が停止しない副梢は2～3葉残して摘心します。伸長が停止しそうな弱い副梢は棚面が混み合わなければ、そのまま放置してもかまいません。摘心後も棚下が暗い場合は、徒長的な新梢を中心に、新梢の間引きを行いましょう。このとき、間引く本数は必要最小限にとどめましょう。

ウ 水分管理

日中の蒸散量が多く、夜間の吸水量が多いような場合、縮果症の発生が多くなるとされています。樹体内の水分変動を少なくするために排水対策を施したり、梅雨明け後の急激な高温乾燥時には適度にかん水を行って、水分の変動ができるだけ小さくなるよう努めましょう。

4 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア りんご褐斑病

研究所内「ふじ」殺菌剤無散布樹で、7月11日に褐斑病の初発（新梢葉）を確認しました。本病は高温多雨条件で急増することから、薬剤散布は10日間隔で実施しましょう。

イ りんご輪紋病、炭疽病

輪紋病は高温多雨が続くと感染頻度が高くなり、炭疽病は梅雨期が重点防除時期にあたります。輪紋病または炭疽病の発生が多い園地では、いずれの病害にも効果のある薬剤を十分量散布しましょう。なお、炭疽病の発生を抑制するために、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去しましょう。

ウ もも灰星病、ホモプシス腐敗病

灰星病及びホモプシス腐敗病の重点防除時期にあるため、いずれの病害にも効果のある薬剤を十分量散布しましょう。

エ ももせん孔細菌病

晩生種で発生が多い場合、マイコシールド 2,000倍を散布しましょう。なお、本剤は使用期間が収穫21日前までのため収穫前日数に注意しましょう。成分回数（オキシテトラサイクリン、散布、5回）にも注意しましょう。また、薬害を生じるおそれがあるので連用しないようにしましょう。

オ なし黒星病、輪紋病

現在、黒星病については「幸水」果実での感受性が高く、輪紋病では果実への感染が多くなる時期であるため、注意が必要です。黒星病、輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布しましょう。さらに、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除きましょう。

(2) 虫 害

ア モモハモグリガ

モモハモグリガ第3世代成虫の発生盛期は7月5～6半旬頃と予想され、第4世代幼虫の防除適期は7月6半旬頃と推定されます。本種の発生には無防除の花もも園や放任園などが影響していると考えられるため、無防除園の管理や放任園の伐採等を行いましょう。

イ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代成虫の発生盛期は7月4半旬頃と予想され、第3世代幼虫の防除適期は7月5～6半旬頃と推定されます。本種は第3世代からなし果実への寄生が増加するため、例年なしでの果実被害が多い地域では、近隣もも園の芯折れに注意するとともに、第3世代幼虫以降の防除を徹底しましょう。

ウ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行いましょ。

表4 主要チョウ目害虫の防除時期の推定
(果樹研究所 平成29年7月18日現在)

今後の 気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ	
	第3世代 成虫盛期	第4世代 防除適期	第2世代 成虫盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	7月25日	7月28日	7月17日	7月24日
平年並	7月25日	7月29日	7月17日	7月25日
2℃低い	7月26日	7月31日	7月17日	7月26日

注) 演算方法は三角法による。

起算日：モモハモグリガ 7月5日、ナシヒメシンクイ 6月20日

病虫害の発生予察情報・防除情報

病虫害防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょ。

発行：福島県農林水産部農業振興課 技術革新支援担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>